

半島・山間地のまち、佐世保市世知原の資源を活かした地域活性化

客員研究員 松尾 宏

キーワード：内陸山間地、炭鉱町、過疎、佐々川、石橋、世知原茶、棚田、里山、
公共の温泉宿、エコツアー

1. 世知原町の概要と地域の素材

長崎県北部の北松浦半島内陸山間地に世知原（せちばる）という町がある。町域は北松浦から東松浦半島一帯に広がる玄武岩溶岩台地の高原とその台状地形が侵食された盆地状の谷底平野がみられるところである。台地上は畑・茶畑、侵食斜面には棚田、盆地底に集落が立地するような特徴をみることができる。世知原町は平成 17（2005）年に南部の佐世保市と合併し、北松浦郡世知原町から佐世保市世知原町となった人口 3,795 人（2010 年）の小さな町である。



図1 世知原の位置

現在の町の主な産業は、町の景観を特徴づける製茶業、棚田を利用した米作と和牛飼育の農業が中心である。その他、町を特徴づけるものとして、町内の佐々川とその支流には明治、大正、昭和の初め頃につくられた 17 基の石橋が残されており、町の歴史的文化的遺産として活用が進められている。また、自然と溶け合った農村風景もこの地域のもつ魅力の一つであり、「長崎県立世知原少年自然の家」がこの世知原町にある。ここでは、キャンプや自然観察をはじめ、ほたる鑑賞会（8 月）、登山（縦走）・ハイキング、世知原茶摘（5 月）および石橋ウォークツアー（9 月）など地域資源を生かした企画が開催されている。また、公共宿泊施設である「山暖簾」の企画によるエコツアーなど複数の地域活性化拠点での活動が町おこしの対策として運用されている。また、世知原グリーンツーリズム推進協議会による自然と資源を生かした活動も行われている。

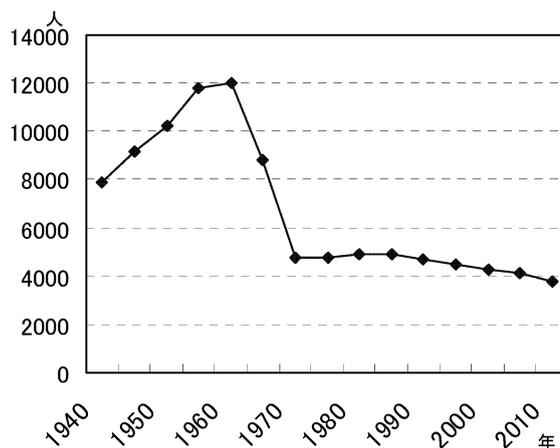


図2 世知原町の人口推移

2. 炭鉱と鉄道資源活用

かつての世知原町を特徴づける基幹産業であった炭鉱は、明治 24（1891）年の国見炭鉱からはじまった。掘り出された石炭を運ぶ手段として、佐世保、北松浦、西松浦郡では最も早い時期に鉄道敷設が行われ、明治 29（1896）年に世知原から佐世保の西に位置する佐々の海岸まで開通している。鉄道は明治・大正・昭和を通じて石炭輸

送の大きな使命を果たしてきた。昭和 20 年（1945）には国鉄世知原線として石炭、旅客輸送として地域の重要な交通機関となっていた。しかし、1960 年代エネルギー革命、海外炭輸入自由化で急速に石炭産業が衰退していくこととなり、世知原町も昭和 45 年（1970）80 年続いた炭鉱が閉じられたことから、人口が減少し町の性格、様子が一変する（図 2）。

炭鉱閉山後の翌年には国鉄世知原線は廃止され、町民の交通手段はバス・自動車に依存することとなった。かつての国鉄世知原線の軌道跡は現在自転車専用道路となって利用され、世知原駅跡には当時のレールと蒸気機関車の車輪が展示された公園となっている（写真 1）。

世知原炭鉱は、一時期は長崎県では高島炭鉱に次ぐ採炭量を誇っていた。かつて町内には 15 箇所の坑口があり、採炭坑口や関連施設跡、ボタ山などの炭鉱遺跡が一部残っており、その一部は観光用に利用されている。また旧松浦炭鉱事務所の建物が世知原炭鉱資料館（昭和 50 年、旧松浦炭鉱事務所を歴史民俗資料館として開館）となっており、写真 2 のような炭鉱の作業や、炭鉱の生活などの写真や各種資料が展示され利用されている。

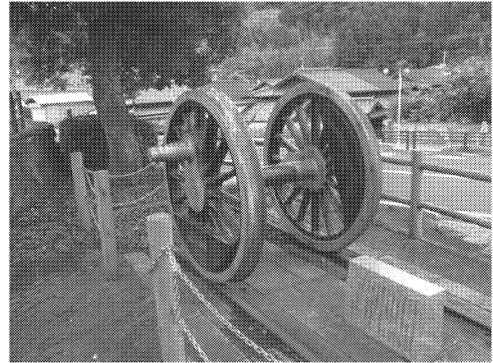
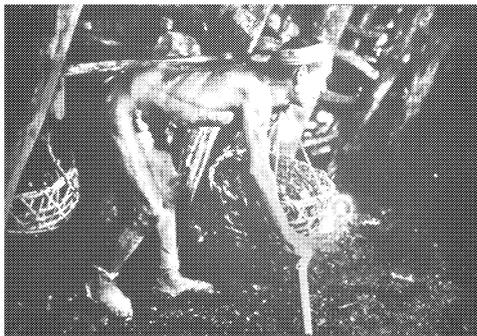


写真 1 世知原線世知原駅跡の公園。レールと S L 車輪が展示してある。



腰を曲げて天秤棒で石炭を運ぶ様子



女性の背籠に採掘した石炭を乗せる男性

写真 2 松浦炭鉱内での労働状況。坑内では男女とも裸で腰を曲げながらの作業で石炭が掘り出されていた（旧松浦炭鉱事務所、世知原炭鉱博物館展示写真より）

3. 石橋—産業・土木遺産

現在の世知原を特徴付ける地域遺産として石組アーチ型石橋の存在がある。石橋は、長崎県県北地方では平戸の幸橋（通称オランダ橋、国重要文化財）が有名であるが、平戸における石橋の技術はオランダから持ち込まれた技術を伝承したとされ、世知原の石橋についても、平戸の石工の技術が県北一帯に伝わったのではないかと考えられている。石橋に使われる石は、一部に安山岩を利用したものがあるが、多くは砂岩が使用されている。現在残る最も古い橋は、明治 30（1897）年に架けられた尾崎橋である。佐々川本流の侵食された崖地にあり、橋長 6.7m に対し橋高 9m の崖上に架けられている。また、最大最長の橋は、佐々川に架かる県道菰田線にある橋長 20.6m、幅員 4.6m、橋高 8.1m の倉渕橋である（写真 3）。倉渕橋は大正 8 年 3 月に架けられた橋で、橋下及び下流付近は、河川公園として整備され、スロープで橋下、川のそばまで入って行け、橋下

からこの橋を見上げて楽しむことができる。

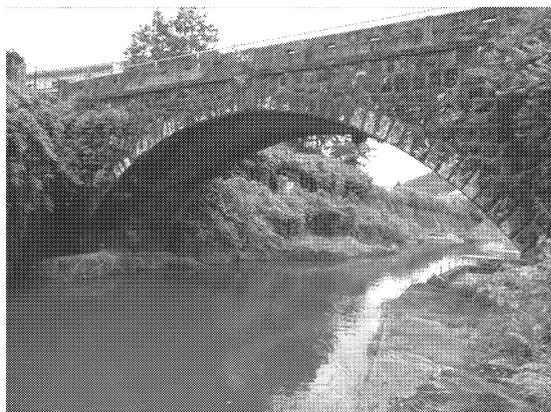


写真3 倉渕橋（筆者撮影）



写真4 桐の木橋（筆者撮影）

石橋の中で最も魅力的な橋は「桐の木橋」と思える（写真4）。それは、大正15（1926）年建設当時の姿をそのまま伝えていること、すなわちこれまで修復の形跡がなく、年月を重ねた石積架橋の傍には当時のものであろうと思われる架橋記念碑が建っている。また周辺の棚田や展望のよい斜面地、一部を除いて人工的な構造物が視界に入らないということが魅力を引きだしている。ただ残念なのは、橋のすぐ上流側部分の護岸工事がコンクリート護岸となっていることで、橋に立って上流側をみた景観は魅力を半減させる。これら石橋を見るツアーが少年自然の家や公共宿泊施設山暖簾などによって企画案内されており、次第に町内外で知られてくるようになった。また、石橋の研究家でもある画家の末長暢雄氏による石橋画やガイドブックなどによる紹介や世知原地区生涯学習センターにより石橋群のイラスト地図が配布され、訪れる人が石橋について理解しやすいような取り組みが行われてきている。

石橋のほか、世知原には前述の知原炭鉱博物館（旧松浦炭鉱事務所）は砂岩ブロックの洋風石積建築として明治45（1912）年に建てられたものであり、その価値は昭和50年（1975）9月に県指定文化財に指定、平成20（2008）年に国の登録有形文化財となっている。その他石造屋敷塀、石積壁、棚田の石垣など石造施設物があり、今後地域資源として価値を生み出すものと思われる。

4. 地場産業－世知原茶

世知原茶は100年ほどの歴史があり、長崎県北地域では歴史の古い茶業地域である。これまで知名度が高いとはいえなかったが、平成8（1996）年には全国茶業大会蒸し製玉緑茶部門で産地賞、平成9（1997）年には農林水産祭において天皇杯を受賞するなど知名度が上がり、「世知原茶」としての地域銘柄を確立しつつあり、長崎ブランドの構築に向けた動きも盛んになってきたことから、「世知原茶」の名前も次第に普及しつつある。

世知原は内陸山間地丘陵地帯で、年間降水量は2,248mmと比較的多く、年平均気温14.7℃、冬には積雪がみられる土地である。長崎県の茶園面積は764ha、荒茶生産量876t（2010年）で、世知原町では、95ha、84tの生産を行っている。茶栽培地は町の中心街を挟んだ南北に位置する板山地区、上野原地区など標高400mから450m付近の丘陵緩斜面を利用して栽培されている。

5. 公営宿泊施設（山暖簾）とエコツアー

世知原町上野原には世知原町（当時）によって平成 16（2004）年 4 月に開業した公共の温泉宿泊施設「山暖簾（やまのれん）」がある。建物は建築家黒川紀章氏の設計によるもので、自然との調和、近未来との融合をコンセプトに建てられ、山並みに溶け込むようなコンクリートと木材を組み合わせた構造であり、展望テラスや 20 の客室全部、露天風呂などから山並み・緑の眺望ができる設計になっている。建物全体が芸術性の高い建物であることから、平成 17（2005）年度の佐世保市景観デザイン賞を受けている。



写真 5 幻想的な溪谷美を町中近くでみることもできる（筆者撮影）

施設はかつての国民宿舎「国見山荘」跡に新たに建設され、旧世知原町が出資した第 3 セクター「世知原温泉」が運営していたものであり、合併とともに佐世保市に引き継がれた。建築家黒川紀章の知名度、近未来型の和風建築、温泉、地域素材の料理などで、県北以外に長崎市周辺や福岡、佐賀両県からの客も多い。

世知原町にとってはこの温泉施設が目玉の一つであり、山暖簾の天然温泉をアピールして、長崎県内外からの集客と同時に世知原エリアでのエコツーリズムの中核施設として地域活性化にもつなげる拠点として位置づけている。この宿泊施設「山暖簾」では、エコプランと題したエコツアーが企画され、表 1 に示すような 3 つの内容のプランが宿泊者に提供されている。宿泊施設でありながら、町の活性化拠点のひとつとしての活動が見られるのは、公共の施設という特色、温泉入浴施設として地元内外からの利用が多いこと、山間地である世知原の活性化推進に行政（佐世保市）が積極的であること、少年自然の家や活性化センターなどとの連携がしやすいなどといったことがその要因といえる。

表 1 エコプラン（「山暖簾」の企画）内容（2014 年）

プラン名	内 容：コンセプト ・・自然を感じ、風・時・空・土に親しむ
懐かしい風景に残る石橋と町並み歩き	佐々川と石橋めぐり、炭鉱施設跡。旧松浦炭鉱事務所を利用した資料館（登録有形文化財）、世知原茶、揚サンドなどの飲食など（3km 2 時間）
いにしへの里山めぐり	国見山山麓の世知原町開作地区の水場、谷や沢をめぐって山間集落田園風景に親しむ（3km 2 時間）
深緑の里山で茶摘体験&揚サンド	世知原茶の茶畑での収穫と茶葉づくり体験および当地グルメの揚サンドを楽しむ。（5 月～8 月）2 時間

6. 世知原と地域振興

世知原は他より特別優れた自然や伝統文化があるところではないと思われる。町に存在する歴史的資源や自然、風景、歴史や暮らしなどを背景とした資源を掘り起こし、町や住民が一体とな

っての取り組みが地道に行われてきている様子
 うかがえる。炭鉱閉山後町は過疎化が進行する。そ
 うした中で世知原町（当時）は、昭和 60（1985）
 年に「全町公園化宣言」を行い、自然景観を見直す
 町づくりをめざした。それは町内の美化・緑化を推
 進するとともに、環境の保全・保護に取り組むこと
 も進めてきた。こうした取り組みが評価され、平成
 10（1998）年 6 月に、「緑化推進功労者内閣総理大
 臣賞」を受賞している。

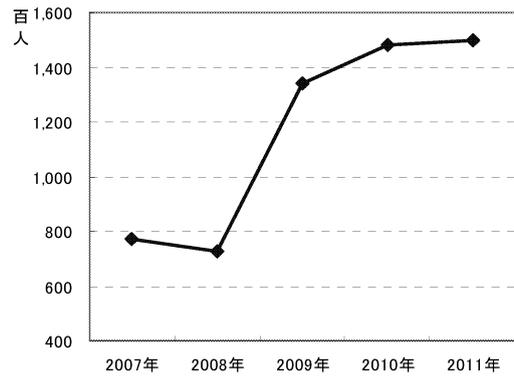


図 3 観光入り込み客数
 （「平成 24 年版佐世保市統計書」より作成）

環境省はエコツーリズムを全国に普及させるた
 めに、モデル地区を設定した助成活動をしている。
 その内容は、①豊かな自然の中での取り組み。②多くの来訪客が訪れる観光地での取り組み。③
 里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取り組みの 3 種類について、平成 16
 （2004）年に全国で 13 箇所をその対象地域として認定した。佐世保地区は②の対象地域として
 選定されているが、世知原町は②の種類モデルとして、異なった取り組み方をしてきたところ
 であり、助成事業として参加していない。それは、地域住民の考えや自由な取り組みが規制され
 てしまうことに対して懸念され、補助金より自由な独自の取り組みを守ろうと選んだことも世知
 原ツーリズムの特徴でもある。世知原町では、平成 14(2002)年に「世知原町グリーンツーリズム
 協議会」を発足させており、環境省のモデル地区としての助成は受けずに、独自の活動スタイル
 で活動を行ってきている。小中学生などの体験学習や町の各種行事などに協力し、他の施設との
 連携による活動が行われてきている。

図 3 は世知原町に訪れる観光客数の推移（佐世保市統計）を示したものである。世知原では、上
 記に示したような地域活性化の取り組みが行われてきたこともあって近年観光客の伸びが見られる。

表 2 世知原町グリーンツーリズムの年間取り組み（体験メニュー）（2013 年）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
菜の花(3月下旬～4月上旬)	茶摘み(5月上旬)	芋挿し(6月上旬～下旬)		ホオズキ出荷(8月上旬)	長崎せちぼろロードレース大会(9月第1日曜日)	大根出荷(10月上旬～下旬)	紅葉(11月上旬～中旬)	しめ縄打ち(12月上旬)		冬の自然を楽しむ(2月上旬)	菜の花(3月下旬～4月上旬)
	茶摘みのつどい(5月上旬)	あじさい(6月下旬)		原始村(8月中旬)		稲刈り(10月中旬)	芋掘り(11月上旬～下旬)	赤木場体験村(12月上旬)			
	田植え(5月下旬)	あじさいロードウォーキング(6月下旬)		くにみ山麓音楽祭(8月第2土曜日)		国見連山縦走(10月中旬)	手打ちそばづくり(11月上旬～下旬)	我が家のお正月(12月下旬～1月上旬)			
	新茶まつり「じげもん市」(5月下旬)		テント宿泊(夏休み期間中)			沢のぼり(5月下旬～10月下旬)					
茶園(4月下旬～5月上旬)						森のつどい(10月下旬)					
茶摘み最盛期(4月下旬～5月中旬)						おくんち(10月29日)					
沢のぼり(5月下旬～10月下旬)											
石橋めぐり(通年)											

7.最後に、地名考・地名文化

世知原にみられる地名は、古代からあるものが多い。また大陸に近い関係から朝鮮文化の影響を受けており、地名の中にもそれを見ることが出来る。セチバルのバル、ハルは「原」の漢字を当てる。原は本来ハラであるが、九州北部地域では「ハル」「バル」と発音される。これは、「HARA」の最後のAがとれて「ル」に近い音になったとされ、朝鮮言語系の影響だとされる。ま

た、世知原には、開墾、農耕関連の地名の開、田、田代、平、木場などの地名がみられる。その他地域単位としての地名に「免」がある。世知原は15の地区区分がなされており、全て「・・・免」の地名が付く。なお、平成17年に佐世保市となったことで、古代から続いてきたこの「免」地名も無くなってしまった。こうした地名を残す工夫がされなかったのは残念である。

8. あとがき

筆者は、世知原町の北隣にある長崎県松浦市と東隣に位置する佐賀県伊万里市で高等学校を出るまで育った。昭和40年頃までは周辺には多くの炭鉱があり、小さな田舎町でも学校や町も人が多いにぎやかな時代があった。炭鉱の閉山とともに人が減り、町は活気を失っていった。地方の町の盛衰要因の一つであった石炭産業（炭田）のほか、足尾銅山（栃木県）や別子銅山（愛媛県）などのように日本各地にあった鉱業地域が地方経済に与えた影響は大きい。

佐賀県の西端にそびえる国見山（777m）を主峰とするこの長崎県との県境山地は、稜線の東は急崖斜面、西側はなだらかな侵食地形となる傾動地塊の形状を示すところであり、低い山並でありながらもこの山々を越すのは難しく、東西交通（佐賀県と長崎県）の難所でもあった。かつての肥前の国を二つの県に別けた理由がここにあると思われる。山の向こうには何があるだろうという子どもの頃の思いがあり、炭鉱でにぎわった町があったということを知ったのは、後々のことである。現在はトンネル（国見トンネルと笠山トンネル）ができて、西の世知原と東の有田、伊万里間はたやすく移動できるようになった。

佐賀県側の伊万里・有田（西有田）側には急傾斜の棚田が連続する。世知原側にも棚田が多くあるが、休耕田になって荒れてしまっているところも見られる。九州の北西のはずれ、半島地域であることから、この辺りは開発からのがれ、いわゆる旧いものが残されてきた地域でもある。かつてにぎやかだった地域がいかによみがえるか、これは全国の地方町村がかかえている悩みでもある。残された地域資源を活かしながら、新たな産業や生活の場を生み出していこうとする町としてこの世知原町が期待される町の一つである。

参考文献

世知原町（1990）：「世知原町郷土誌」

隅部 守（1993）：肥前半島の眼鏡橋―長崎県波佐見町・世知原町を中心に―、立命館地理学第3号

寺井清宗（2007）：山でがんばる生産者 長崎県北地域（佐世保市世知原町）の世知原茶振興会の取り組みについて 月間「茶」2007年9月号

嶋野準也（2009）：させぼエコツーリズムの現状―世知原町を事例として―、観光学論集4

佐世保市（2012）：「平成24年版佐世保市統計書（第22回）」（平成25年3月刊行）

世知原町グリーンツーリズム推進協議会ホームページ（平成23年8月14日閲覧、

<http://www.sasebo99.com/sechibaru/greentourism/index.html>）

読売新聞（2007）：新聞記事（2009年1月13日より）<http://spanews.exblog.jp/9404791/>

白骨の道「下野清徳の回顧録」（2013年8月14日閲覧、

<http://blog.goo.ne.jp/simono72/e/b7eb657212594eb08a863b03bc34af7b>、

<http://blog.goo.ne.jp/simono72/e/10302b72fae7b7b73aa9c6f4ab76d57a>）